



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

7

ユゴー

氷島奇談

島田尚一訳

デュマ

黒いチューリップ

松下和則訳

中央公論社

世界の文学 7

©1964

ユゴー

デュマ

訳者 島田尚一

松下和則

昭和39年8月1日初版印刷

昭和39年8月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ユゴー

氷島奇談

デュマ

黒いチュールリップ

解説

年譜

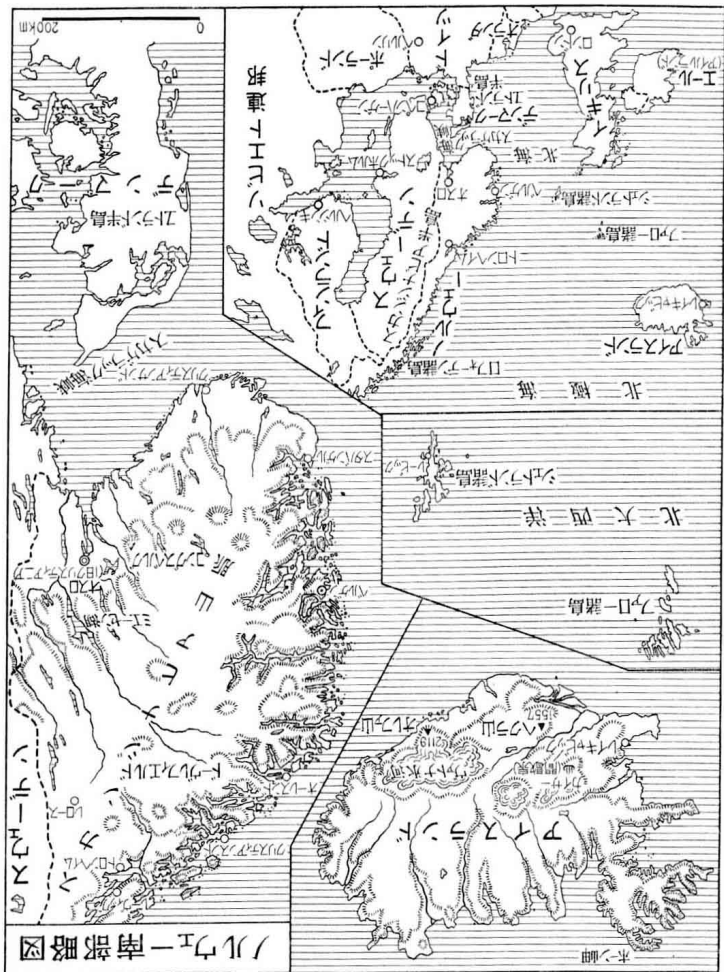
3

365

610

628

水島奇談



「あんた、そいつを見ましたか？ だれが見たんです？」「私じゃありませんよ」「じゃあ、だれです？」「それがさっぱりわからないですよ」

スターン『トリストラム・シャンディ』

「これが恋の末路というもんじゃやて、なあ、ニールスさん。あのかわいそうなグート・ステルセンだって、おいらの古なじみの、あのおやじの舟を修繕したり、網をつくろったりすることだけを考えてりや、向こうのあの黒い大きな石の上に寝かされるようなことにやならなかつたらうよ。まるで潮がひいたあとの海星^{ひとで}みたいにさ。漁師の聖ウスフさま、どうかあのおやじの悲しみを慰めてやっておくんなさい！」

「そして、あの娘の許嫁^{いなかづけ}で、ほら、あれのすぐそばに見える、若い男前のギル・スタートだって」と、鋭く、ふるえをおびた声が言葉をついだ。「グートにほれたり、あのいまいましいレロースの鉱山^{いんざん}なんかへ一旗あげに行

ったりしないでさ、あのあばら屋のすすけた大梁^{おほはり}の下で、弟の揺りかごでもゆりながら、若いころを過ごしていりや、こんなところへ来なくてすんだものをね」

最初の男に話しかけられたニールスが、それをさえぎって言った。「オリーばあさん、あんたも年をとって物覚えが悪くなったね。ギルにや弟なぞなかったじやないか。だからこそ、かわいそうにスタート後家^{ごけ}は、なおのことつらからうというもんさ。何しろ、いまじやあの小屋には、まるで人っ気がなくなつちまつたんだからね。心を慰めようとして空を仰げば、目にはいるのは古ぼけた屋根ばかり。その屋根にや、からっぽになった子供の揺りかごが、いまだにつつてあるのさ。子供はりっぱに成人しながら、死んじまつたんだ」

「気の毒なお袋さんだよ！」とオリーばあさんが言葉を吐いた。「だってさ、若者のほうは自業自得だもんね。でも、何だってレロースの坑夫^{いんぐふ}なんかになったんだらう？」

「じつさい、わしは思うんだが」とニールスが言った。「あのいまいましい鉱山のやつ、一文分の銅^{いんぐ}を出すごとに、人間の命を一つずつ奪っていきやがる。ブロールさん、あんたどう思うかね？」

「坑夫どもは馬鹿^{ばか}なのさ」と漁師は答えた。「生きていたけりや、魚は水から出ちゃだめだし、人間は地下^{ち地下}にもぐつちやいけねえんだ」

「しかしだね」と、群衆のなかの一人の若者がたずねた。「ギル・スタートが嫁をもらうためにや、どうしても鉱山で働かねばならなかったとしたら？」

「色恋のために命まで危くするなんて、もつてのほかだよ」とオリーばあさんが口をはさんだ。「色恋なんて、命にくらべりゃ、とるに足りぬもんさ。命にや代えられませんよ。まったく、ギルはグートのためにきれいな新床どを手に入れてやったもんだよ！」

「じゃあ、あの若い女は」と、いま一人のやじ馬がたずねた。「その若者の死に絶望して身投げしたんだね？」

「だれがそんなことを言っただ？」一人の兵士が人ごみのなかへ割りこんできて、大声で叫んだ。「おれはその娘をよく知っているが、なるほど、若い坑夫の許嫁ではあったよ。その坑夫は最近、レロースの近くの、ストルヴォードウスグルーベの地下坑道で、岩に押しつぶされちまったがね。しかしその娘は、おれの友たちの情婦おんなでもあったのさ。おとといのこと、娘はこっそりとムンクホルムへ行つて、許嫁の死を恋人といっしょに祝おうとしたんだ。ところが、乗っていた舟が暗礁に乗りあげて転覆し、娘はおぼれちまったのさ」

ざわめきが起こった。「まさか、そんなことがあるもんかね、兵隊さん！」と老婆たちは叫んだ。若い連中は黙っている。そしてニールスは皮肉な調子で、漁師プロ

ールの言つた「これが恋の末路というもんじゃて！」という重々しい文句を繰りかえした。

兵士は自分にくつてかかる女たちに対して、いまにも本気で怒りだしそうだった。彼はすでに女たちのことを、「キラゴート洞窟の鬼ばあめ」と呼んでしまつたし、女たちのほうでも、こんなひどい侮辱を受けては、じつと我慢しておれなかつた。ところが、このとき、「静かにせんか、静かに、この老いぼれども！」と叫ぶ、甲高い、命令的な声が起こつて、この喧嘩けんかにけりをつけてしまつた。ちやうど、雌鶏たちがぐくくつと鳴いているところへ、ふいに雄鶏がおたけびをあげたときのように、あたりはしんと静まりかえつた。

この場面のつづきを語る前に、それが起こつた場所を描いてみるのは、おそらく無益なことではあるまい。それは——たぶん読者もすでにお察しのことと思うが——世間の同情と社会の先見の明によつて、身元不明の死体を収容するためにつくられた、あの陰気な建物のひとつであつた。おおむね不幸な生涯を送つた死者たちの、これは最後の住みかである。ここには、よそよそしいやじ馬や、冷笑的な、あるいは好意的な観察者、またしばしば友人や、涙にぬれた身内のものが集まつて来る。身内のものは、長い、たえがたい不安のちに、ただひとつ残された悲しい希望にとりすがつて、ここへやつて来

るのだ。何しろ遠い昔のことではあり、それに、私が読者をお連れして来たのは、ほとんど文明も開けていない国であるから、汚辱と黄金でできたわが国の都市で見られるように、こういう収容所を、不吉は不吉なりにどこか気がきいていて、陰気は陰気なりにどこか優雅なところのある墓所に仕立てようなどとは、まだだれも思いつかなかった。そこでは、日光が墓の形をした窓からさしこんで、芸術的な彫刻をほどこした丸天井を照らし出し、種々さまざまなベッド——そこには、死者たちにいくらかでも生活の便を残しておいてやろうというのだらう、ちゃんと枕までついているのだが——の上に光を投げかける、というようなことはなかった。番人の家の戸が開いていても、今日のように、趣味のよい家具やほかかな子供たちを見て、まっ裸の醜い死体に疲れた目を休める、というようなわけにもゆかない。ここでは、死はその醜く恐ろしい姿をすっかりさらけ出していたのだ。肉の落ちた死体を玉総たまぐさやリボンで飾ろうなどとは、まだだれもしなかったのである。

さっき話あっていた人々がいた部屋は、広くて暗かった。暗いために、いっそうだだっ広く見える。日光は、わずかに、トロンヘイム港へ向かつて開いている四角い低い戸口と、天井の粗造りの窓からはいつて来るだけだ。この窓からは、ちょうどその真下に横たわっている死体

の上に、白っぽくどんよりとした光がさしこんでいたが、天候しだいで、雨や霞や雪もここから降って来るのである。この部屋は、胸ほどの高さの鉄の欄干によって、二つの部分に分けられている。一般の人々は、四角い戸口から表側の部分にはいる。もう一方の部分には、黒い大理石の長い板が六枚、平行に並べてある。どちらの部分にも小さな脇戸がついていて、番人とその助手の出入口になっている。彼らの部屋は、海を背にした建物の裏手にあるのだ。坑夫とその許嫁は、二つの大理石のベッドに横たえられていた。娘の死体はすでに腐りかけていた。手足の血管にそって走っている青と緋色の大きな斑点でそれがわかる。ギルの顔はいかつく陰気なように見えたが、死体がずたずたに切断されているので、彼が本当にオリーばあさんの言うほど美男子であったかどうかは判断できなかった。

さっき忠実に書き写した会話が、無言の群衆のただなかで始まったのは、こういう醜い遺骸の前でだったのである。

一人のやせこけて背の高い老人が、部屋のいちばん暗い片隅で、こわれかけた椅子に腰をおろし、うつむいて腕組みをしていた。はじめのうちは、みんなの話にぜんぜん注意を払っていない様子だったが、突然「静かにせなか、静かに、この老いぼれども！」と叫んで立ちあが

り、こちらへやって来て兵士の腕をつかんだのである。

みんなは口をつぐんだ。兵士はふり向いて、この奇妙な妨害者を見ると、だしぬけに大声で笑いだした。じつさい、そのやつれた顔、薄くてきたない髪の毛、長い指、馴^なれ^れの皮の服などを見れば、兵士がこうして吹きだしたのも無理はない。しかし、一瞬茫然^{もんぜん}とした女たちのなかから、やがてざわめきが起こった。「死体收容所の番人だよ」「このむごたらしい死人の番人め!」「鬼のようなスピアグドリ!」「いま、美しい魔法使いめ!……」

「静かにせい、老いぼれども、静かにせんか! きょうが魔女のお祭りの日なら、さっさと箒^{ほうき}でもさがしに行くがいいんじや。さもないと、箒は勝手に飛んで行ってしまうぞ。この雷神^{北歐神}の尊い子孫をそつとしておいてくれ」

こう言ってからスピアグドリは、顔につくり笑いを浮かべながら、兵士に向かって話しかけた。

「なあ、おまえさん。おまえさんの話じや、このあわれな女は……」

「このくそじじい!」とオリーがつぶやいた。「そうとも。こいつから見りや、私らはみんなあわれな女なのさ。私たちの身体^{からだ}じや、自分の爪^{めづめ}にかけて殺しても三十アスカリンにしかならないもんね。ところが、どんなやせっぽちでも男でさえありや、四十アスカリンはもらえるんだ

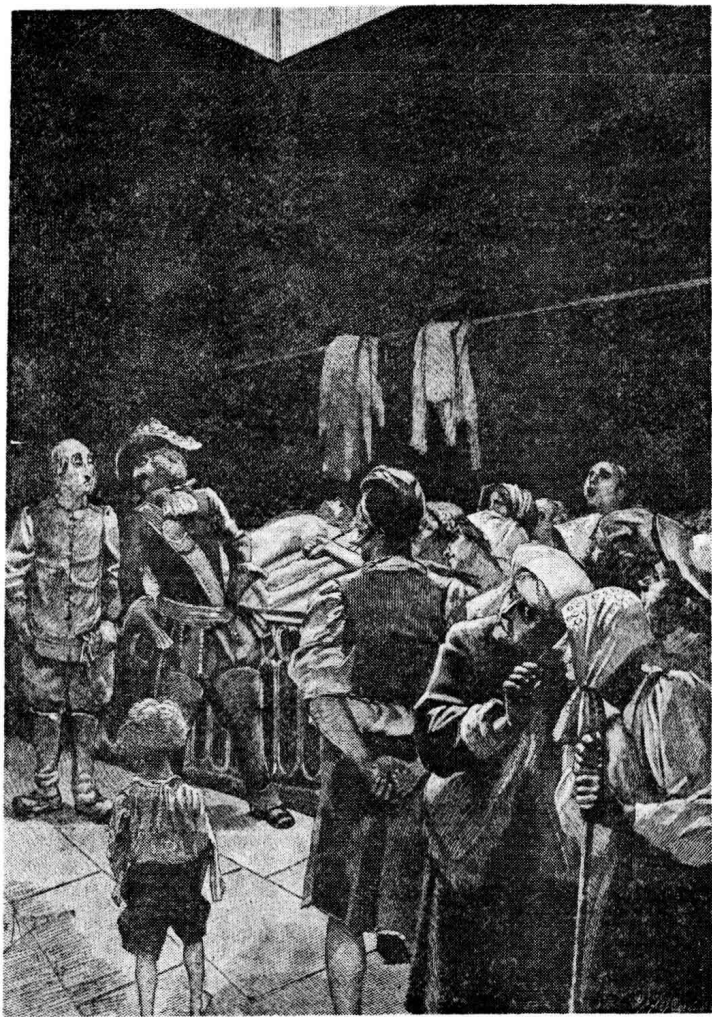
から」

「黙ってろ、くそばばあ」スピアグドリは繰りかえした。「まったく、こういう悪魔の娘どもときちや、やつらの釜^{かま}と同じことで、熱くなってくると、ぶつぶつほざかずにやおれんのだから。ところで、なあ、サーベルの大將、このグート^{グート}を情婦^{めかけ}にしていたっていう、おまえさんの友だちは、この女を失ったのに氣をくさらせて、きつと自殺するだろうね?……」

ここにいたって、長いあいだ抑^{おさ}えられていた怒りが、ついに爆発した。「この不信心者の言うことを聞いたかい、この異教徒のじじいの言うことを?」と、たくさん甲高い声が口々に叫んだ。「こいつは、人間がまた一人死んでほしいんだよ。そうすりや、四十アスカリンという金がごろがりこむからさ」

「それがどうしたというんじや?」死体收容所の番人は答えた。「われらの慈悲深き王にして主君でいらせられるクリステイアン五世も——陛下の上に聖ホスピティウスさまの祝福がありますように!——余は生まれながらにして、すべての坑夫たちの保護者だと、こう仰せられているんじゃないか? これはな、坑夫たちが死んだら、やつらのくだらない遺物で王室の財産を富まそうというおぼしめしなのじや」

「そりやまた、陛下にとつちや名誉至極なこったな」と、



漁師のブロールが言い返した。「王室の財産とおまえの納骨所の金庫とをくらべたり、陛下とてめえとをくらべたりするなんてのはさ。なあ、スピアグドリのおやじ」
「おやじだ」と！番人は言った。あまりなれなれしく言われたので腹が立ったのだ。「おやじとは何ごとじゃ！同じ言うなら、だんなと言ってもらいたいね。いずれあんなにも、この六つの石のベッドの一つを、一週間ばかりお貸しする日が来ようからな、漁師さん。それに」と、笑いながらつけ加え、「わしがその兵隊さんが死んだ話をしたのも、ただ、こういうご婦人どもが男の心にたきつける悲惨な色恋のために、自殺の習慣が慢性化するのを見たいと思ったからにすぎんのか」
「ところで、骸骨番の骸骨じじい」と兵士は言った。「つまりおまえは、何が言いたいんだい？ そんな愛想笑いを浮かべてさ。まるで首をくくったやつ、最後の笑いにそっくりじゃないか」
「こりやおみごとじゃ、兵隊さん！」スピアグドリは答えた。「わしはつねづね思ってたんですがね。サーベルと舌で悪魔を退治した憲兵トゥルンの、兜をかぶった頭のはらが、アイスランド史を書いたイスレイフ主教の、冠をかぶった頭や、わが大寺院のことを書いたシェーニング教授の、角帽をかぶった頭より、よっぽど気がきいてまさあ」

「じゃあ、おい、皮袋みたいなじじい。おれの言うことを聞く気があるんなら、こんな納骨所の実入りなんぞふり捨ててさ、ベルゲンにある総督の骨董室へ、おまえの身体を売りに行ったらどうだい。聖ベルフェゴールさまにかけて誓って言うがね、あそこじゃ、珍しい動物はとでも高く買ってくれるんだ。それはそうと、おまえ、おれに何の用があるんだい？」
「ここに持ちこまれる死体が海で発見されたものなら、料金の半分は漁師どもに譲らなきゃなりませんのじや。だもんで、憲兵トゥルンの立派な跡継ぎさん、わしはおまえさんからそのかわいそうなお友だちに、海なんかへ飛びこまないで、何かほかの死に方をするように言ってもらいたいと、こう思ったのじや。その男にとっちゃ、どっちも同じことだからね。それに、その男だって、自分の死体を手厚くもてなしてくれる、しがたないキリスト教徒に、損をさせようなどとは思いますまい。もつともこれは、その男がグートを失ったために、そういう捨てばちな真似をやらかすとしての話ですがね」
「そりゃ考え違いだよ、情け深く客あしらいのいい番人さん。残念ながらおれの友だちは、この六つのベッド付きの、感じのいい宿に泊めてもらえまいよ。あの男が、グートの死んだことなどとつくにあきらめて、別の女とよろしくやっていないとも思うのかね？ おれのこの

鬚^{ひげ}にかけて言うが、あの男は、もうずっと前からグートにや飽きていたのさ」

兵士がこう言うと、喧々囂々たる非難の嵐^{あらし}が巻き起こった。さつきしばらくスピアグドリに向けられていたこの嵐が、いっそうすさまじい勢いで、不運な兵士に襲いかかったのである。

「何だって、この悪党めが」と老婆たちはわめきたてた。「おまえたちは、いつもそんなふうにして、私ら女のことを忘れちまうんだね！　こうとわかりや、こんなならず者なんかには惚^ほれるんじゃないよ！」

若い女たちは、それでもまだ黙っていた。なかには、この不良、なかなかいい男だわ、と思う女もいたくらいだ。

「ほほう！」と兵士は言った。「こりやまた魔女のお祭りの稽古^{けいこ}かね？　こんな合唱を週に一度ずつ聞かされるんじや、パールゼブ^{（聖書に出てくる魔王）}もさぞ辛^{くる}からうな！」もしこのとき、みんなが外のざわめきにすっかり注意を奪われてしまわなかったら、この新たな突風の騒ぎはどんなことになっていたかわからない。ざわめきはしだいに大きくなり、やがて大勢の半裸の少年が、二人の男のかつぐ、覆いかけた棺架^{かつか}のまわりを、わいわい言って走りながら、騒々しく死体収容所^{したいしゆくお}にはいつて来た。

「どこから持って来たのじゃ？」番人は運んで来た男た

ちにたずねた。

「ウルクダルの砂浜からでさあ」

「オグリピグラップ！」と、スピアグドリは叫んだ。

脇戸が開き、草の服を着たラブランド族の小男があらわれて、運搬人^かたちに、ついて来いと合図した。スピアグドリも三人のあとからついて行^いった。物見高い群衆が、棺架^かにのせられた死体の長さから、それが男であるか女であるかを判断する暇もないうちに、戸はふたたびしまった。

この話題をめぐって、みんながまだあれこれと推測しているうちに、スピアグドリとその助手は、男の死体をついで、また第二の部屋にあらわれ、死体を大理石のベッドの上に置いた。

「こんなきれいな服にや、長いことさわつたことがねえよ」オグリピグラップは言った。それから、頭をふりふり背伸びして、美しい大尉の軍服を、死者の頭上につるした。死体の頭部は醜^{みにく}く形を変えてしまっており、他の部分も血まみれだ。番人は、これかかった古い手桶^{てびく}を使^{つか}って、何度も死体に水をかけた。

「パールゼブにかけて！」と兵士は叫んだ。「こりやおれの連隊の士官だぞ。待てよ、ポラール大尉だろうか。……伯父^{おや}さんをなくしたのを嘆^{なげ}いて死んだのかな？　そんなばかな！　彼は遺産を相続するんじゃないか。――

とすると、ランドメール男爵かな？ やつこさん、きのう自分の地所をかけて、ばくちをやったからな。だが、そんなもの、あすになりやとりもどして、おまけに相手の屋敷まで奪っちまうだろう。——では、犬がおぼれ死んだ、あのロリー大尉かな？ それとも、女房に浮気ばかりされている主計のストウंकだろうか？——しかし、まったく、だれの場合も、頭に一発ぶちこまなきゃならぬ理由などないんだがな」

群衆は刻々とその数を増してゆく。と、このとき、波止場を通りかかった一人の青年が、この群衆を見て馬からおり、お供の従僕に手綱を渡して、死体收容所にはいつて来た。簡素な旅行服を着て、サーベルをつり、緑色の大きな外套に身をつつんでいる。黒い羽根が一本、ダイヤモンドの尾銃で帽子にとめてあるが、それが気品のある顔に落ちかかって、長い栗色の髪のかぶさった秀でた額の上で揺れていた。半長靴と拍車が泥にまみれていることから、彼が遠くからやって来たことがわかる。

彼がはいって行くと、これまた外套に身をつつみ、大きな手袋をはめた、ずんぐりとした小男が、兵士に向かってこう答えているところだった。

「で、この男が自殺したなんて、だから聞いたんだ？ この男は自殺したんじゃない。おれが請けあうよ。ちょうど、大寺院の屋根がひとりで燃えだしたんじゃない

のと同じことさ」

ちょうど二股の投げ槍が傷を二つ負わせるように、この言葉から二つの答えが出てきた。

「大寺院だって！」とニールスは言った。「いまじゃ、その屋根は銅でふいてあるがね。あのハンのやつが、坑夫どもに仕事をさせたいばかりに、あの大寺院に火をつけたっていう話だぜ。その坑夫どものなかに、ほら、そこにいる、やつの子分のギル・スタートもはいってたわけさ」

「何だと！」と兵士も叫んだ。

「ムンクホルム守備隊の第二火縄銃手であるこのおれに向かつて、その男が自分で脳天をぶち抜いたんじゃないなどと、よくも言えたもんだな！」

「この男は殺されたのだ」小男は冷ややかに答えた。

「まあ、こいつのご託宣を聞いてやってくれ！ まったく、きさまの灰色の小さな目は節穴だよ。ちょうど、その分厚い手袋のなかの手と同じようにさ。真夏だというのに、手袋なんかしやがって」

小男の目がきらっと光った。

「おい、兵隊！ この手の跡が、いつかきさまの顔に刻みこまれることがないように、いまのうちに神さんに祈っておけよ」

「何を！ さあ、外へ出ろ！」兵士は怒りに燃えて叫ん

だ。しかし、ふいに怒りをおさえて、「いや、やめておこう。死人の前で決闘の話は禁物だから」

小男は、聞きなれぬ言葉で二言三言つぶやくと、姿を消してしまった。

「この死体が見つかったのは、ウルクダルの砂浜だよ」と、だれかが言った。

「ウルクダルの砂浜だって？」兵士は言った。「デイスボルセン大尉がコペンハーゲンからやって来て、けさそこへ上陸したはずだ」

「デイスボルセン大尉は、まだムンクホルムにや着いていないぞ」と別の声。

「アイスランドのハンがいまごろ、その浜辺をうろついているという話だぜ」四番目の男が答えた。

「してみると、この男が大尉かもしれんな」兵士は言った。「もしハンが殺害者だとすればだ。というのはいだね、だれでも知っているように、あのアイスランド人の殺し方は悪辣きわまるので、その手にかかった者がまるで自殺したように見えることが、よくあるからね」

「いったい、そのハンというのはどんな男なんだい？」と、だれかがたずねた。

「大男さ」と、一人が言った。

「いや、小びとだよ」と別の男。

「すると、だれもその男を見たことがないんだね？」と

だれかがつづけた。

「あいつを見たが最後、生きちゃ帰れねえんだよ」

「しっ！」とオリーバあさんが言った。「あいつと人間の言葉をかわしたのは、これまでたった三人しかないという話だよ。あの悪党のスピアグドリとスタート後家と、それから……ここにいるかわいそうなギルさ。——でも、ギルは生きているうちにも不幸だったし、死に方のみじめだったからね。しっ！」

「しっ！」と、みんなが繰り返した。

「そうだ」と、突然兵士が叫んだ。「こりや確かにデイスボルセン大尉だよ。おれはこの銅鉄の鎖に見覚えがある。大尉が発発するとき、囚人のシュマツケル老人から贈られたものだよ」

黒い羽根をつけた青年が、ふいに沈黙を破った。

「たしかにデイスボルセン大尉だとおっしゃるのですね？」

「間違いありません。パールゼブの功德にかけて誓いますよ！」と兵士は言った。

青年は大急ぎでそこを出た。

「ムンクホルムへ舟を出させてくれ」彼は従僕に言った。「しかし、だんなさま、將軍のほうは？……」

「おまえは馬をひいて將軍のところへ行ってくれ。僕はあす行くから。僕は自分の思うようにしてはいけないの

かい？ さあ、日が暮れる。僕は急ぐんだ。早く舟を」
従僕は命令に従った。そして、岸から遠ざかって行く
若い主人を、しばらくのあいだ見送っていた。

二

時間つぶしに何か面白いお話をしてくだ
さるあいだ、私はあなたのおそばにすわ
っておりましょう。

マテユリン『パートラム』

読者もすでにご存じのように、この物語の舞台はトロ
ンヘイムである。トロンヘイムは総督の所在地でこそな
かったが、ノルウェーの四大都市の一つだ。この物語の
背景となっている時代——一六九九年——には、ノルウ
エー王国はまだデンマークに統合されており、ベルゲン
に駐在する総督によって治められていた。ベルゲンは、
かの有名なトロンプ提督（オランダの提督。一五九七—一六五三）から悪趣味
な異名をちょうだいしているにもかかわらず、トロンヘ
イムよりも大きく、南方的で、ずっと美しい都市である。
トロンヘイムは、この町の名が冠せられている湾から

はいって来ると、とてもながめが美しい。天候いかんに
よっては容易に入港できるというわけにはゆかぬが、港
はかなり広い。しかし、当時それは、一見長い運河に似
ていて、法令の命ずる区分にしたがって、右側にはデン
マークおよびノルウェーの船がならび、左側には外国の
船が碇泊していた。その背後には、よく開けた平野の上
に町が横たわり、大伽藍（だいがらん）の高い尖塔（せんとう）がそびえている。ス
ピアグドリが物知りぶってひきあいに出したシェーニン
グ教授の著書には、この教会がたび重なる火災のために
荒廃する以前の姿が描かれているが、それを見てもわか
るように、この教会はゴシック建築の最も美しい作品の
一つだ。中央の尖塔には主教の十字架がついているが、
これは、トロンヘイムにおけるルーテル派主教区の伽藍
であることを示すしるしである。町の上高く、青みがか
ったかなたには、キエーレン山脈が、古代の王冠のとが
った花形装飾にも似た、白くすらりとした峰々を見せて
いる。

港の中央、岸の大砲の射程距離内にある、波に洗われ
た岩の群れの上に、ムンクホルムの砦（とりで）がさびしくそびえ
ている。当時この陰気な牢獄には、長いあいだ隆盛をき
わめたあげく、またたく間に没落してしまったことで有
名な、一人の囚人が幽閉されていた。

シュマッケルは卑しい身分に生まれながら、主君の寵（もよう）